
SIT DOWN 魔王!!

HEERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SIT DOWN 魔王！！

【Nコード】

N9063I

【作者名】

HERO

【あらすじ】

魔王をやるのも大変なんだな〜という事を伝えたくて書きました。嘘です、本当は何も考えてません；

(前書き)

> i 6 4 5 0 — 2 1 0 <
頑張れ魔王!!

傍らに佇む部下が、無表情のまま口を開く。

「魔王様、同じ姿勢で座り続けていると、肛門部が鬱血して、いば痔の原因となります」

「…分かつている」

魔王となつてこの世界に君臨し、早300年。

最近俺は思い初めてきた。「何やってんだろっ」と。

生まれた時、いや、生まれる前から俺の前には一本のレールが果てしなく延びていた。俺は深く考える間もなく、言われるがままにそのレールの上を辿る事となつたんだ。

そしてすぐに出会う事となつた。レールで俺を待ち構えていた、“魔王”という立場と。

使命だから、運命だから、そんな綺麗な言葉を周りの者達は並べるが、当の俺はそんな立場に少しも魅力を感じてなどいなかった。とにかく過酷なのだ、魔王という職は。

世界各国へ向けての定期的な脅迫文作成（30言語使い分け）、勇者を悩ませるダンジョンの設計（全国1200ヶ所）、呪われた武具の製作（度々自分も呪われる）、雑魚モンスター・スライムの着色（エンドレス）、etc…。

これで月17万だというのだからたまつたものではない（そこから所得税や保険料が差し引かれる）。

だが実際に仕事についてみて一番辛いと感じている点は、作業よりも、それらを行うこの“状態”かもしれない。

「魔王様、同じ姿勢で座り続けていると、肛門部が鬱血して…」

「ええい、黙れ！！ 立場上しかたないのだ！！」

そう、魔王はいつ勇者が来てもいいよう、常に玉座でどっしり構え、厳然たる空気を醸し出さなければならぬ。

つまり、ずっと座ってなければならぬのだ。

「分かっております。ですから、少し腰を浮かすなどして…」

「ああ、そうだな…」

俺は少しだけ腰を浮かせた。

「魔王職がこんなキツイとは思わなかった。思い切り立ちたい。立ってフラフラプとかホッピングとかやりたい。むっちゃ楽しそうじゃん、あれら」

300年座り続けていると価値観が変わる。

「金がもう少し貯まったらこんな仕事やめてやる。もうかなり振り込まれてるだろうしな」

「何をおっしゃるのです。魔王様は魔王を辞めたりなんて出来ません」

突然部下が信じられない事を言い出した。

「魔王の任を解く方法は勇者に敗れる他ないのです」

「何だと…では死ぬまでここで座つてると言うのか!? じゃあ

給料は何なのだ!? 座つたままでは使えんだろ!!」

「使いに行かせれば済む話でしょう。あと通販とか」

「それだけで済むものか! 俺はアミューズメントスペースというものに身を置いてみたいのだ!!」

「ゲーセンなどですか? 使いの者に遊ばせ、後で感想を貰うというのは?」

「切ないわ! スリルと興奮はダイレクトに体感してなんぼやる!!」

俺は半泣きになりながら関西弁を口にしていた。

「ん? 何だか外が騒がしいですね」

「外? ああ、確かに。何かあったのだろうか」

『勇者だ! 勇者が侵入したぞおお!!』

「ゆ、勇者！？」

部屋の外から聞こえたその声に俺は歓喜した。

「やっと…やっと…やっと来たか勇者ああ！ 立てる！ これで立てるぞおお！！」

魔王は現れた勇者に決まり文句を言い終えたら、戦闘を行うために立ち上がる事が出来るのだ。

「さあ早く俺の元へ来い！」

来い来い来い来い来い！

『勇者を倒したぞおお！！』

「え…？」

勇者を倒した…？

『何だこいつ、Lv12じゃねえか！ ああ、やりこみプレイつてやつね！ 道理で弱いと思っただぜ！』

表情にまで溢れ出していた喜びが、瞬く間に憤りへと変わった。

俺は傍らの部下に命令を下す。

「勇者を討ち取った者をここへ呼べ。褒美を渡す…」

「渡したいのは引導じゃないですか？ 私情で部下殺したりなんかしたら、軍団の志気が落ちますよ？」

「……じゃあ、いい」

正直、もう何もかもどうでもよくなってきた。何故こんな存在として生を受けてしまったのだろうか。

「あつ…」

不意に部下がそんな声を漏らした。俺はどうしたのかと尋ねてみた。

「ゴキブリです」

言いながら部屋の隅を指差す部下。そこには確かにゴキブリがいた。

「私ゴキブリ苦手なんですよ」

「俺もだ…」

部下はゴキブリのいる方とは反対側の壁へ移動し始めた。

「おいコラ、一人だけ逃げるでない！ 命令だ、俺の隣にいろ！」

「いや、いくら魔王様の命令でも、こればかりは…」

魔王の威厳がゴキブリに劣るとは。まあゴキブリを恐がってる時点でアウトな気もするが。

「では、○○○ンを持ってきます。奴の息の根を止めてやりましょう」

「なるほどバ○○ンか……ん？ バル○ン！？ ちょっと待て！俺はこの部屋から出られんのだぞ！？ 魔王がバルサンで死ぬなんて洒落にならんのだろ！！」

確かに死にたい気持ちにはなっていたが、バルサンだけでは、バルサンの煙剤だけには殺されたくない。

そんな事を考えている時だった。

「あつ、魔王様、ゴキブリが…」

「げっ！」

ゴキブリが羽根を広げ、こちらに向かって飛び立つ。何故わざわざ人のいる方へ飛んで来るのか。ゴキブリ最大の謎である。

「うわああああ！！！」

もう駄目だ、殺られる！

向かって来る黒い悪魔ゴキブリに魔王オレが叫び声を上げている最中、部屋の扉が勢いよく開かれた。

「勇者だ！ 魔王を倒しに来た！」

なんとグッドなタイミング！ 新たな勇者が俺の前に現れたのだ。

俺は勇者に向かつて究極的な早口で「よくぞここまでたどり着いた勇者よ我こそは闇の力を以てこの世界に絶望と恐怖による秩序を齎さんとする魔界の王なり！ フッフ勇者よ我はお前の力を大きく買っている我的右腕となればこの世界の半分をくれてやつてもよいぞ！ ほうやはりこんな取引には応じないか馬鹿な奴めならばこの魔王が直々にあの世へと葬ってくれる！」と言い終えると、速攻で立ち上がり、ゴキブリを派手なアクションでかわした。

「セエエエエエフ！！！！」

両腕を振り上げ、雄叫びを上げる。

「な、何なんだデメエは！？」

啞然とした顔で勇者が尋ねた。俺はそれに答える。

「言っただろう、魔王だ！」

「ああ！？ 適当に魔王やってんじゃねえよ！ 何だよあの早口！ 何だよセーフって！」

「勇者ともあるう者が気付かなかったのか？ 俺へゴキブリが飛んで来た事を」

「知らねえよ！！ たく…！！」

ん？ やけに機嫌が悪いなこの勇者。まさかとは思うが…

「もしかして世界の半分欲しかったか？」

「ち、ちげーよ！ そんなんじゃねーし！」

欲しかったんだな、かわいい奴め。

「だがもう遅い。お前はいらないうったのだからな！」

俺は勇者にビシツと両手で指を指した。

「はあ！？ そりゃデメーが勝手に決めたんだろ！！ だあ！ 本気でム力ついてきたぜ！」

勇者は剣を抜いた。恐らく“王者の剣”だろう。デザイン的に。

「この王者の剣かと思つて装備したら実は呪われた武器でもその割にはなかなか強力なのでここまで持ってきた“邪神の剣”でデメエを断つ！！」

勇者は呪われていた。

「面白い、やってみよ！」

もついい。魔王でいるのにも疲れた。ここでこいつにやられるのも悪くないかもしれない。

だが、事は俺の思惑通りには進まなかった。

「くそっ！ 効かねえ！！」

勇者の剣が俺に通用しないのだ。

「勇者よ。お前、レベルはいくつだ？」

「65だ！」

決して低くない。

「弱点…か。きつと俺には弱点があるのだ。そこを攻めねば俺はダメージを受けないのだろう」

「弱点だったって、もうほとんどの場所は攻撃したぞ？ まだ攻撃してない所と言えよ…」

勇者は俺の背後に回った。

「ケツだ」

「ギイヤーアアアアア！！！！」

俺の尻に、邪神の剣がヒットする。

「見事だ…勇者よ……。まさか、我の“いぼ痔”を攻めるとは…」

「いぼ痔…？ そつか、お前、ずっと座ってたもんな…」

次第に暗くなって行く視界。そんな俺の瞳が閉ざされるその瞬間まで映し出していたもの。それは憐憫の眼差しで自分を見つめる勇者の姿だった。

「…あれ？」

急に視界が明るくなった。

足元を見ると、勇者が呆然と俺を見上げている。

「勇者よ、小さくなったな」

「テムエがでかくなつたんだよ…」

なるほど、俺がでかく……………でかく!!!?

「ぬぁぁんてこつたぁぁぁ!!! “第二形態”があつたのかー

!!!」

しかも変身によつていば痔が完治してるときた。こりゃそう簡単には死ねそうにない。

「おい魔王! 何ブツブツ言つてんだよ!!!」

「ええい、黙れ!!! 今考え事しとるんじゃ!!!」

俺は軽々く勇者を蹴り飛ばした。そしたら…

「し、死んだ!?!」

勇者は俺の足の親指が少し当たっただけで死んでしまった。どうやら強くなり過ぎてしまったようだ。

勇者を倒したからだろう、俺の身体が第一形態である元の姿へと戻って行く。もし第二形態のままだったら次に来た勇者がいきなりクライマックスの戦いを強いられる事になるので、そうならないための配慮だろう。

「お疲れ様です、魔王様。ささ、次の勇者に備えて玉座へお座りください」

部下に促され、俺は再び玉座に腰を下ろした。

「あゝもう嫌だ魔王なんて。早く来いよ強い勇者!」

「そう簡単には現れませんよ、魔王様を倒せる勇者なんて」

「さっきの奴は結構いい線いってたんだがな…」

「それでもないですよ。第二形態の魔王様からしたらアリ同然だったでしょう?」

「うつ、まあな…」

言われてみればそうだ。第二形態になってからの俺は、第一形態の時とは比べものにならない程の強さを誇る。そのパワーときたら、殺意が無くても相手を殺めてしまう程だ。

俺が魔王としての役目を終えるのは、もう少し先の用だな…。

「魔王様……」

俺の気持ちを察したのか、部下が同情の眼差しをこちらに向けた。
「こんなじゃ、“第五形態”の魔王様を倒せる勇者なんて永遠に現れないかもしれませんね」

「……………は？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9063i/>

SIT DOWN 魔王!!

2011年11月15日09時05分発行